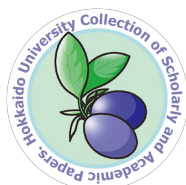




Title	武田泰淳「淑女綺談」論：終戦前後の上海における女性表象
Author(s)	趙, 文軒
Citation	国語国文研究, 163, 26-40
Issue Date	2024-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96087
Type	journal article
File Information	163_3.pdf



武田泰淳「淑女綺談」論

——終戦前後の上海における女性表象——

趙 文 軒

一、はじめに

武田泰淳の「淑女綺談」(『改造』一九五一年五月号)は、博士夫人である氷川愛子を主人公に、終戦直前の上海を舞台として、愛子が郷中尉の愛を受け、夫の意見にしたがって郷の護送のもとで華北へ疎開しに行くまでを描いている。途中で、中国側の遊撃隊の襲撃を受け、郷は戦死し、愛子は無事に天津に到着し、夫へ手紙を送ったところで物語は幕を閉じる。

本作が発表される前に、終戦前後の上海をめぐる「蝟のすえ」(『進路』一九四七年八月—一〇月)や「審判」(『批評』一九四七年四月)を代表とする一連の「上海もの」がすでに生み出された。それらの作品には、日本人は敗戦によって「世界によって裁かれる罪人」となったという思想が通底している。そのほか、「才女」(『随筆中国』一九四五年九月)と「F花園十九号」(『文学界』一九五〇年

九月号)には住居を追われるなど、いわゆる日本の敗戦にともなう登場人物の転落が描かれているが、「聖女俠女」(『思潮』一九四八年六月)と「女の国籍」(『小説新潮』一九五一年一〇月)は女性の語りで終戦前後の女性表象を扱った作品もある。しかし、このような多くの作品の中で、終戦直前の交戦時の日中双方の戦闘場面を詳細に描写するのは「淑女綺談」のみである。

本作の氷川愛子にはモデルが存在し、「月光都市」(『人間美学』一九四八年一二月号)と「苦笑の前後」(『小説界』一九四八年一一・一二月合併号)にも同じ女性をモデルとする人物が登場している。この三篇に描かれる女性を比較すれば、女性描写における思索の軌跡が明らかにされるはずである。とりわけ、物語時間が「苦笑の前後」より前に設定されている「淑女綺談」は「苦笑の前後」の後に発表されたので、その経緯をたどるならば、本作の女性表象に取り組むという創作意図が浮上するだろう。さらに、題名における「淑女」という部分にも焦点を当て、武田の戦争中の女性のありように対す

る捉え方を掘り起こすことができる。

これまで女性の戦争責任という問題は論じられてきたし、文学の分野で林芙美子を代表とする女性作家の戦争協力に関する研究が不十分ながらも行われてきたが、小説の中で日中戦争やアジア・太平洋戦争における一般の女性と戦争との関連がどのように描き出されているのかという問題について十分に論じられたとは言いがたい。そして、武田泰淳研究において、管見の限り、この点から「上海もの」における女性像を捉える研究は確認できない。また、本作は、戦後武田文学の出発点として、繰り返し描かれた敗戦体験から生み出された滅亡思想と「審判」などの作品によってあらわれている武田自身の中国に対する罪悪感に当てはまらないので、同時代にはあまり注目されず、先行研究も少なかった。

本論では、「淑女綺談」において、戦争における女性がどのような転機に直面するのか、どのような行動を取るのかという点に注目しながら、本作を読み直したい。また、本作のヒロイン像の独自性を検討するために、他の「上海もの」の女性物語を視野に入れ、戦後前後を背景に、上海における女性のありようを考察する。

以下、本作の愛子についての描写にしばって、女性はどうのように表現されるのか／され得ないのかという問題について考察する。他の作品のヒロイン像と比較しながら、本作の「上海もの」の女性物語における位置づけを試みたい。次に、まず本作のヒロインとしての愛子に関する造型の経緯を確認してみよう。

二、「月光都市」と「苦笑の前後」

——「淑女綺談」以前

「月光都市」は、日本軍占領下の中秋節の上海を舞台として、上海に赴任したばかりの武田と思われる杉という主人公の上海で出会った異国文化をめぐる小説である。

「苦笑の前後」は、同様に武田自身がモデルとされているような牧という人物が、無事に日本に戻った後に、一九四五年二月に敗戦が明らかになった上海で、満枝や岸博士、小島とともに過ごした一日を回想した小説である。

周知のように、武田が自らの上海時代の経歴を題材とした小説は少なくない。「月光都市」、「苦笑の前後」と「淑女綺談」における夫人の設定は、先述したようにほとんど同一であり、そして上海時代の彼の周辺に夫人のモデルと思われる女性が実在していた。また、この三篇に登場した博士の名前は異なるが、モデルは同一である。実在の人物から作品の登場人物を造型することについて、武田は竹内好との対談「戦争と中国と文学と」（『波』一九七四年三月）では、「それから僕はひとつ言っておきたいんだけど、僕の（上海もの）にはみなモデルがあるんです」（『武田泰淳全集』別巻二、二二六頁以下『全集』）と証言している。

武田は、一九四四年六月に上海へ渡り、中日文化協会附属東方文化編訳館の出版主任を務めた。最初に知り合いの山口二郎の家に同居するつもりだったが、山口に断られ、滬西の安和寺路にある同協

会理事の小竹文夫の家に居候することになった。同年二月二九日、惇信路にあった福世花園十九号に移り住んだ。これは、「小竹文夫先生のこと」(『月報』五九)、『世界文学大系』五B『史記Ⅱ』、筑摩書房、一九六二年七月)での回想からも確認できる。

小竹は一九〇〇年一月一日に金沢で生まれた。京都大学文学部支那史学科を卒業し、上海の東亜同文書院の教授をつとめ、後に中日文化協会の理事になった。武田と出会ったときに、彼はすでに上海に三十年も住んでいた。

小竹家についての描写は「上海もの」において散見される。「月光都市」で「博士の家は安和寺路にあった。旧交通大学に近く、外人の邸宅ばかり並ぶ閑静な一角であった」(『全集』第一巻、一五二頁)と記している。「苦笑の前後」における博士の家は滬西にあり、交通大学の近くの「赤煉瓦の美しい西洋式住宅地」である。それらの記述を見ると、物語の舞台となる博士の家は明らかに小竹家である。「淑女綺談」において、博士の家についての描写は確認できないが、博士の設定は小竹と関連していることに違いない。武田は回想の中で、小竹の交友関係を次のように語っている。

だが、よく考えてみると、上海における交友関係の広いことでは、小竹先生の方が、(林広吉に——引用者注)はるかにまさっていたようだ。とにかく、ニヒリストの青年、愉快な古木屋、道教にこった老人、重慶や延安と連絡のあるらしい学者文人。

(『全集』第一六巻、五七九頁)

右の引用にある「ニヒリストの青年」は「苦笑の前後」では牧として造型され、「淑女綺談」には北として登場している。「道教にこった老人」は、「淑女綺談」の「十数年間、道教の教えを守り、菜食と青春の妾たちの精気のおかげで老いてますます旺^{さか}んな」漢方医師と重なっている。また、武田は、同じ職場の夏小姐(正しくは夏小姐である——引用者注)が、自分に「先生はおやさしいから、女には好かれますわ」と語ったことがあると記述し、小竹について「タンなる学究というような、単純なタイプの先生ではない」「クセモノ」と評価し、「白い良心のみならず、黒い知恵も貯える男」(『全集』第一六巻、五八〇頁)と捉えている。このような小竹についての捉え方は、「淑女綺談」の「好色漢」で「瀟洒たる美男子」であり、時として腹黒い考えがある博士の人物像と一致しているのである。以上の経緯から見ると、この三篇における博士夫婦は小竹文夫夫婦をモデルとしていると断言できる。

「月光都市」の夫人にはいくつかの台詞があるが、「苦笑の前後」の夫人は他の登場人物の台詞にしか登場しない。また、この二篇における夫人は名字さえ与えられない。さらに、「奥さんと子供が北支へ行」ってからの「苦笑の前後」は物語時間で「淑女綺談」の「後篇」に属するはずだが、夫人に重点を置かず、三人の男性と満枝という女性との群像を描いている。つまり、「月光都市」と「苦笑の前後」では、夫人はあまり詳細に描かれず、重要ではない存在と言える。

それに対して、「淑女綺談」の水川愛子は、作中で唯一のフルネームが与えられた人物である。他の登場人物である水川博士と郷と北

は、名字つまりファミリーネームのみで表記されている。このようなフルネームが付与された女性人物は、武田文学ではあまり見られないのである。例えば、同様に「上海もの」に属する「非革命者」(『文芸』一九四八年五月号)における「M喫茶店の彼女」や、「聖女俠女」に登場する「梅(崎)女士」⁸、そして「上海の蜩」(『海』一九七六年二月号—九月号)における「林小姐」などは、いずれもフルネームが付与されていない。「上海もの」では、武田によって作り出された数多くの女性人物の中で、フルネームが与えられたのは、管見の限り、氷川愛子と「女の国籍」の「陸淑華・大和淑子」だけである。とりわけ「上海もの」においては、大部分の女性が匿名あるいは苗字のみ・名前のみで登場することを考えると、この二人の独自性が見られ、「上海もの」においてフルネームを使うことに意味があると考えられるだろう。

さらに、この二篇の発表時期を見ると、ほぼ同時期に創作された作品なので、これは偶然ではないだろう。一九五一年という時点で、武田は「一月、鈴木百合子と結婚」し、「十月、長女花を得」た。⁹郭偉によつて指摘されているとおり、百合子との結婚は「泰淳自身も養子であったことと合わせて、泰淳にとって、女性・婚姻制度・家制度について考える契機になり得」る。¹⁰この背景を踏まえれば、「陸淑華・大和淑子」という姓名に顕在化される人物の国籍問題¹¹とは異なり、「氷川愛子」の場合は、「氷川」という妻という役割を示す結婚後の姓以外に、「愛子」という元来持っている名前／エゴ・自己を保持していると解釈できる。それがゆえ、本作のヒロインはこの「女性、婚姻制度、家制度」に関する問題意識から生まれた存在と言える。

る。

以上のように、「淑女綺談」のヒロインのモデルと従来の作品における登場を明らかにした。また、氷川愛子の姓名論から、他の「上海もの」における女性キャラクターとの区別が浮上してきた。つまり、本作では、武田は再構築された夫人という女性像を通して、前には描いていなかった家庭と個人のほだまに生きるヒロイン像を作り出そうとする意図が窺える。

ところで、「上海もの」において、武田は一連の作品の中で、しばしば女性と日本軍とのつながりを描き出している。本作も例外ではない。そのため、次に、女性と戦争との関連性という問題に重きを置き、戦争における女性のありようを見てみよう。

三、女性と戦争との関連

小竹夫人をモデルとする人物は「淑女綺談」の前に二回武田の初期作品に登場したが、これらにおいては重要ではない存在で、その人物造型についてあまり工夫が凝らされていなかった。ヒロインとしてつばさに造型されるのは「淑女綺談」である。本章では、本作の愛子についての描き方を検討した上で、他の「上海もの」におけるヒロイン像を取り上げ、戦争中の女性の活動に着目し、それぞれの女性と戦争との関連を明らかにしたい。まず、本作の愛子を見てみよう。

冒頭部分の氷川愛子についての描写から、淑女と良妻賢母のようなイメージが窺えるのみならず、彼女の性格上の特徴もあらわれて

いる。つまり、愛子はテキパキした美しい婦人である一方で、気が強い側面も持っていることが強調されている。後の「下手な自転車」を走らせて、北は博士一家のこまごました買物も引受けている。優柔不断の彼と、気強い愛子はうまが合っていた」（『全集』第一巻、二七一頁）という記述は、北と対照的な愛子の性格を伝えている。さらに、「頭が良」い「日本式美女」という表象はモデルの小竹夫人と重なっていることが確認できる。また、そのしたたかな女性像は「上海もの」に通底している。¹³

作中の男性人物から捉えられる愛子のイメージは、次のようになる。北からは「いかなる悪にも耐え得る、危険な婦人」（『全集』第一巻、二七一頁）と見なされている。他方で、「奥さんは強い人ですよ。僕はそこが好きですね。人間は強くなくちゃ。問題は信念です。信念にしたがって、強く生きるこつてす」（『全集』第一巻、二七八頁）という郷の台詞も、愛子の性格を示しているが、彼の評価は北とは異なる。後述するように、郷は愛子を理想的な愛国婦人として愛していることがわかる。博士の場合、疎開の途中で、鉄道が破壊されたので、彼の上海に帰ろうという提案を拒否した愛子に対する感情は、「いよいよこの女は、一家心中を俺に強制する気かと、博士は頑固な愛子を、あらためて憎悪した」（『全集』第一巻、二八〇頁）というところから確認できる。総じて、これらの男性たちは愛子の強い性格を認めることは共通しているが、北はその強さを畏れ、郷は賞賛し、博士は嫌悪しているという、異なる態度が示されている。

このような三人の男性による外的焦点化は、「才女」¹⁴と同様であり

ながら、後に発表された「女の国籍」の女性の内的告白とは異なる。また、六年前の「才女」という作品に比べ、本作では武田が単一の焦点ではなく、複雑で多様な角度から女性を描写することを選んだと見られる。このアプローチで、物語に登場する三人の男性人物は愛子に対するそれぞれの欲望を表出し、男性としての立場から異なる自らの評価が提起されることが可能になる。ただし、注意が必要なのは、これらの評価は、女性の身体性に対する欲望によるものではなく、愛子の性格的／精神的な側面に集中していることである。

次の箇所において、登場人物の男性たちの愛子に対する評価の違いは、一層はつきりと表現されている。

愛子は、郷のたのもし手の甲に、自分の白い掌を重ねた。男は遠慮深く手を引こうとして、熱愛する淑女を見つめた。優雅な女は恍惚と、剛直な男に見入り、指先の力を加えた。この場合、博士ならば好敵手の天晴れな腕前を、北なら女賊の毒気を、その表情と仕草に認めたはずであった。だが中尉はただ、純潔の愛国婦人の、祖国防衛者に対する献身と聖愛を享受して、感激した。（『全集』第一巻、二八三頁）

博士と北の場合、愛子の行為を演技と解釈する一方で、郷は愛子を淑女と見なし「純潔の愛国婦人」などと評価している。ここでは、女性の行為が異なる男性から見ると、全く違う意味に読み取られることが示されている。また、明白なのは、郷が次第に濃くなる敗戦の兆しを背景に、愛子とのロマンチックな恋に落ちていったことで

ある。郷が「純潔の愛国婦人」の「祖国保護者に対する献身と聖愛」に惚れているのは、それが彼の「祖国防衛者」という自己認識と重なるからこそである。

郷にとつて、愛子は「徒らに暖衣飽食する兵站や司令部の将校」を恥じさせる「強力な精神」を持つ「理想的な愛国婦人」である。それに対し、北は愛子が虹口の日本人租界へ招かれ、国防婦人会¹⁵の集まりに参加したときの身支度に「女賊」「女犯罪者の巧妙な変装」「悪性女の匂い」を感じた。こうした評価から積極的に国防婦人会に行った愛子の姿勢を演技と看破した北の批判が見られる。

それは軍人としての郷が見る愛子とは正反対である。「俺は国家に身をささげている。彼女もまた」（『全集』第一巻、二七七頁）と考える郷は、軍人として愛子のような「純潔の愛国婦人」に惹かれている。いずれにせよ、そのような言説によつて愛子は積極的に戦争を支える愛国婦人としての側面が繰り返し強調されている。

「淑女綺談」の愛子のみならず、武田は「上海もの」で数多くの日本軍と関係した女性を描いている。「才女」の周は日本関係の会社勤め、日本人の有力者として交際しなかった。上海の日本人社会を舞台に、才女として働いた彼女は自身の日本に協力した罪を自覚している。周は蔡大使を批判したときに、彼女の愛人だった黄は彼女の発言に相槌を打ったが、彼女に「だめですよ。上海にいる人なんてロクな人じゃありませんよ。本当に勇気のある青年だったら、重慶へでも延安へでも行けばいいですよ」（『全集』第一巻、一一一頁）と言われた。この発言から自分を含めて日本軍統治下の上海に安住している中国人全体が無抵抗であることに對する批判が読み

取れる。

終戦後、新聞で漢奸問題が大きく取り上げられるようになったときに、彼女は「私は大丈夫ですわ」と述べているが、共産分子の潜入を非常に恐れた。それは、周が日本に協力した中国人として、共産党に殺されることを心配しているからだだろう。この点について、「F花園十九号」における謝の末路を見ると、周との異同が浮き彫りになる。謝は自身の漢奸行為の罪を自覚し、結局そのために殺された。「才女」において、周は漢奸罪で審判されるとは描かれていないが、彼女が日本軍と協力したことによる処罰を心配していたことは記されている。

次に「聖女俠女」を見たい。梅（崎）（「私」）は戦時中、軍の金と物資を利用し工場を運営していた。終戦後、中日両国の婦人の座談会に出席したときに、下記の発言によつて、日本軍の力に依存していた責任を自己批判している。

「私は本日の会に出席する資格のある者ではありません。どなたが私を指名され、招待されたのか存じませんが、私をおえらびになったのは明かにあやまりです。なぜならば、私は日本の軍の金を使って、工場を経営していたものだからです（中略）」このような戦犯あるいは漢奸に近いような女に発言を許してさしつかえ「ございませんか」（『全集』第一巻、一九六頁）

ここで、梅（崎）は戦犯あるいは漢奸であるという自己認識により、自身の戦争協力を告白している。この告白の中で、戦犯という

言葉は見逃せない。無論、これは彼女の日本人というアイデンティティに由来するのである。わざわざこの言葉を使ったのは、「日本の婦人は中国の婦人の民主的傾向に学んで……」と発言した岸という男に対する反発だということである。また、戦犯という言葉が漢奸の前に配置されているのは、彼女の日本人というアイデンティティの優先順位が発話行為において無意識に露呈していると読み取れるだろう。

また、興味深いのは、漢奸という言葉の使用である。いわゆる、日本人たる梅（崎）は明らかに漢奸に該当しないので、この言葉を使って自己批判しているのは違和感がある。この言葉によって、梅（崎）は日本人であることと中国人であることの二重性を意識しているが、すでに指摘されたように、これも彼女の「偽りの越境体験とアイデンティティの「装い」であろう。

一方で、「獣の徽章」（『新潮』一九五一年一〇月）の「色」という登場人物の「それ（漢奸——引用者注）は日本の日常で聴く「戦犯」の二文字より、はるかにどぎつい色彩と堪えがたい臭気をおびて伝えられた。許しがたい悪、スパイ、裏切り、奇怪な非人間的な異物、その他あらゆる恐るべき内容を充満させて、それは凝結していた」（『全集』第三巻、一一六頁）という印象を考慮すると、なぜここで漢奸という言葉を用いるのかが理解できるだろう。

つまり、梅（崎）はこの言葉を通して、自らが中国に対する裏切り者であるという自己認識と罪悪感の強さを表明しているのである。また、この中国に対する裏切り者という自己規定は、親中派でありながら戦争協力をした日本人に特有のものである。それは、お

そらく武田が中国・中国文芸を愛しながらも、日中戦争の際に一兵隊として参加し、終戦直前に上海で宣撫工作に従事していたという引き裂かれた経験に由来するであろう。

「女の国籍」に至ると、陸は「軍需物資を買い漁る日本側の機関に、秘書として就職」した。そのため、終戦後、亡くなった父も売国奴と批判された。陸はその点について「私の受けた打撃は致命的でした」と述べている。「混血、雑種、売国」と批判される陸は、自身の身分問題のみならず、明らかに戦時中の日本軍関係の仕事をしたこと、いわゆる「売国」行為に反省と後悔の念を抱いている。

これらの女性物語において、彼女らは全て戦争協力に結び付く仕事や活動に能動的に参加したことがあると設定されている。彼女たちが日本軍統治下の上海で生活していたことを考えると、それは珍しいことではないが、それを殊更共通項として描いている武田の執筆意図は見逃せないだろう。

武田から見る女性たちは戦争の被害者というだけでなく、積極的な協力者でもある。しかし、作中において、彼女たちが戦争責任を取るべきだとは描かれていない。むしろ、過酷な戦時下において、周のように、女性は戦争遂行に加担した仕事をしたことに罪悪感を自覚しながらも、生活のために我慢しつつしたたかに生き残ろうとした。そういう一面を描こうとしたのだと読み取れるだろう。

それを踏まえると、武田は終戦前後の上海で実際に目にした日本軍統治下の女性のありようをモチーフとして「淑女綺談」などの女性物語において、女性の戦争への加担の問題を扱おうとしたことが明らかになる。ただし、本作の愛子の動機は、明らかに金を稼ぐた

めの周などとは異なる。次に、愛子の愛国の一面に着目し、その動機と意味を検討してみよう。

四、淑女からの解放の試み

本作の愛子は容姿に恵まれ性的魅力もあり、かつ信念のある有能な存在である。しかし、このような愛子は家庭の主婦として終始、夫・博士の支配下に置かれる。この点について、博士もまた愛子自身も、当然のこととしてこの従属関係を受け入れている。博士は「彼女（愛子）——引用者注」を俺の方針〔無事に日本に帰る——引用者注〕に従わせるのはなかなかむずかしいが、それくらいの苦心はしてやって然るべきだ」と考え、自らの支配欲を顕示している。また、愛子を愛する郷に対しては、「だが可哀そうに、愛子は賢明な俺の自由になる。支配者は愚直なお前ではないのだ」と皮肉を交えて優越感を表現している。夫は支配者で、妻は夫に従うべきであるというのは、「夫や家への絶対的服従」を妻の婦徳とする日本の家制度に根付いていたのである。これは愛子にも受け入れられている。華中への避難について議論するときに、彼女は以下のように述べている。

「私の気持と言われても、私は主人や皆さんの御意見に従うだけですよ。旧式な考え方かもしれませんが、日本の妻は死ぬべき時は、夫と共に死ぬのが当然だと、私のわかっているのはただそれだけなんです」（『全集』第一巻、二七二頁）

ただし、ここで注意すべきは、愛子がこのように発言しているにもかかわらず、実際には博士の引揚げの提案を断ったことである。つまり、愛子は夫の意見に従うべきだと言いつつも、上海に残り夫と共に死ぬということを主張している。この点について、先に引用した「むずかしい」という言葉からも、博士は愛子が従順な女性ではないことを認識していることが読み取れる。つまり、郷に「理想的な愛国夫人」と評価された行為は、実は夫や家庭からの要求／抑圧に反抗するための「大義名分」であると言い換えることができる。これを踏まえて、愛子が国防婦人会に参加した動機を再検討したい。その日の愛子の身支度に関する描写を見よう。

その日、氷川愛子のもんべとたすき、それに可愛い足首をキツチリしめつける足袋までが、黒紫の木綿製である。暁の闇に似て、深く秘められた夜と晴がましい朝の微妙な一線を劃すその色は、愛子の細い首すじと、「バーマ」をかけぬ前髪をかくす、防空頭巾にも応用されてあった。（『全集』第一巻、二七一頁。傍点原文）

ここつづさに描かれている愛子の服装は、当時の国防婦人会（以後国婦）の主張に従うもので、時局に相応しい。「国防は台所から」というスローガンを掲げる国婦は、かつぼう着を制服として、労力奉仕を通じて愛国的な活動を行なった¹⁸。それに対して、郷とデートした日の愛子の姿は下記の通りである。

青黒い木立を背にして、夫人は青年を正面から見つめた。厚地の支那服の両側は、頸のあたりで割れている。踵の高い女靴を踏まえた、絹靴下のふくらはぎは、足首の勁い筋を受けついで、さらびやかな裾に隠れた、太もの丸みに連なっている。火の鳥の肉の柱が、そこにある。眼前に、立ちすくんでいる。そして、雌鳥は死ぬと言う。郷はおびえ、同時に盛り上がった。（『全集』第一巻、二七八頁）

こうした身体性を強調し、女性としての魅力を前面に出す身支度は、先の地味な実務的な服装と対照的である。そのため、郷はこうした愛子の姿を、先に見たばかりのバレエの雌鳥に重ね、男性としての欲望が押さえがたくなったのである。さらに、普段は美しい支那服を着用する「有閑婦人」である愛子が、もんべやたすきなどを身につけることは、庶民になるための「変装」、いわゆる異なる身分への越境行為であると言える。それを通じて家から出て社会活動に参加できるようになるのである。この「変装」は愛子が日常生活から抜け出す契機ともなり、名流夫人から庶民へ、家庭から社会へという二重の境界線を越えることの象徴となるだろう。

再び女性の姓名論に触れるが、ここで注目したいのは、愛子の呼称の使い分けである。前述のように、氷川愛子のように、フルネームがある女性人物は、「上海もの」において武田によって創り出された女性登場人物では珍しい存在である。作中において「氷川夫人」「夫人」と「愛子夫人」「愛子」という二種類の扱い方が存在する。特に愛子という元来の名が個性をあらわす記号として果たす役割は

見逃せない。防空頭巾の「愛子」と支那服の「夫人」との対比を見ると、服装によって演じているペルソナが顕在化されている。そのため、愛子が国婦に参加するのは、身分の変化による自己解放の意味を持つと解釈できるだろう。

そして、戦争は愛子にとって、女性解放／自己解放を追求する格好のチャンスで、自らのアイデンティティを見つけるきっかけとなる。次の箇所は、淑女の枠組みを越えるアイデンティティの覚醒が見られる。

戦争という巨大なスキャンダルに呑みこまれる。日常の気がね、気苦労は、非常の不安の中に消え去る。このとき、淑女は無限の可能性をあたえられる。彼女は悪女、烈女、淫女、その他あらゆる種類の「女」に、わが身を変じてさしつかえない。車中の愛子夫人が微笑を漏らすのは、その自由を味わっている証拠である。（『全集』第一巻、二八二頁）

ここで、淑女としての日常は、愛子にとって負担であることが示されている。戦争によって、愛子は淑女以外の女性としての可能性を得たことがわかる。特に見逃せないのは、「自由」という言葉である。この言葉から、戦争のおかげで、愛子が常に囲まれていた淑女という桎梏から解放されたと読み取れる。これも先の分析を裏付けている。彼女は郷との恋を通して、夫／家庭の桎梏から脱し、自分のアイデンティティを確立しようとする。彼女はその愛国婦人という身分を利用し、自由に振る舞い、巧みに自らを淑女と規定するジェ

ンダー規範に立ち向かい、自ら家庭の枠組みに限定されている夫人という身分からの解放を求めるようになった。

要するに、愛子の行動は、戦争支持ではなく、むしろ当時（戦時中の日本）の制約的な条件下で、できるだけ女性としての自由を確保するための行動だったと言える。つまり、愛子は決して否定されない愛国精神という名目を利用し、家制度や男性支配の社会規範に挑戦し、またある程度成功した。

一方で、以上のような愛子のやり方を見ると、女性の自由も恋愛の自由も、男性への献身や国への忠誠に包摂されることが浮き彫りにされている。また、愛子らしく自らジェンダー規範の桎梏から脱そうとする行動も国家主義に取り込まれ、下位の従属的なものとされ、結果的に愛子は自身の夫に反抗する思想を日本の戦争遂行に統合させてしまった。

そして、愛子は結局家庭における淑女というジェンダーの制約を超えることができなかった。郷の死後、愛子が天津に着いた後に夫へ送った手紙は、家庭に戻ることを意味すると解釈できるだろう。また、結末において彼女の表記が、「愛子」から「夫人」という呼称へと転換したことも、この点を裏付けている。ここから、男性としての武田のジェンダーに関する認識の限界と、根強い家制度が存在していた日本の深刻な問題が浮かび上がる。「上海もの」において、本作のヒロインの独自性はこのようなジェンダー問題を可視化した点にあると考えられる。

五、郷の死における加害責任

上記の考察を通して、本作の愛子の愛国的な行動の動機は、彼女が淑女という規範から自己解放され、自らのアイデンティティを探そうとすることにあった。その限界はありながらも、アイデンティティの覚醒と女性解放という意味合いがあることを明らかにした。これらが本作の独創性にあると考えられる。ところで、その過程で愛子が郷を利用したことは見逃せないだろう。郷は愛子を愛国婦人と見なし愛していた。一方で、愛子は彼の愛情を利用し、華中への護送に巻き込んだことによって、郷の死の原因となった。

次に、愛子と郷の関係を手がりとして、武田の女性観を検討する。とりわけ最後のシーンにおいて、戦いに向かった郷を愛子が制止しようとしたが、結局失敗するという展開について、郷の死に対する加害責任の問題を考えながら、何を意味するのかという問題を考察したい。

この問題に触れる前に、郷と愛子の関係を見直す必要がある。郷は軍人として、博士の家の向こうにある憲兵隊の秘密宿舎から出発し、「鉄道沿線にばら撒かれて、敵側の情報を探る」日本軍のスパイたちの活動を目撃した際に、「そんな血なまぐさい荒仕事も、愛子夫人の如き、か弱い日本女性を守り抜くためではないか。その彼女がいなくなる？」（『全集』第一巻、二七三頁）と考えている。自分たちの軍人たる役割は日本女性を守るためであると自ら規定している。「女性には保護される側、男性は保護する側」という固定的な図式

が示唆されている。そのみならず、「その彼女がいなくなる？」という自問から愛子がいなければ、自分の仕事は意味がなくなってしまうと考えていることが読み取れる。

一方、愛子は「我々は国家のために死ぬ。恋愛の私情を捨てねばならぬ。それでこそ日本人だ」と話した郷を称賛した。また、郷は「奥さんは強い人ですよ。僕はそこが好きですね。人間は強くなくちゃ。問題は信念です。信念にしたがって、強く生きるこつです。我々国民は、大目的に向って、一路前進するのです。そして時が来れば、命を棄てるんです。そのほかに何がありますか」と吐露した。それに対して、彼女は「郷さんは、もうすぐ死になさるのね」「そう決めたのね。……わたしも死ぬわ」と「接吻なさってよろしいのよ。死ぬんですもの。あなたには、その権利があるわ。なさって」（『全集』第一巻、二七八頁）と肯定的に応じた。

この会話を見ると、愛子は死を覚悟した郷を支持し、接吻の権利、自分と恋愛する機会を郷に与えた。つまり、愛子と郷の「恋愛」は、郷が愛子に献身し生命も捧げる関係を前提に始まったのである。そして、死の覚悟がこの小説において繰り返され、それはのちの郷の死を準備する。ただし、次の箇所を加えると、注目すべきは、ここでの愛子の「わたしも死ぬわ」という発言が嘘だという点である。また、郷との付き合いは、愛子にとって本当に恋愛だと言えるかどうかという疑問も残されている。

もしもその時（郷が博士の代わりに、夫人たちを華中へ護送すると話した時——引用者注）、博士が、自分が連れて行くと一

言洩らしさえすれば、或いは（絶対に不可能な事であるが）出しゃばりの軍人と喧嘩でもしてくれたら、愛子は夫を許したかも知れぬ。しぶしぶながらも、一家連れ立って上海へ引返したであろう。彼女とても、自分の命は大切にする女だ。夫をこらしめて快を貪るに過ぎぬ。だが博士は、妻の思惑を裏切り、そのどちらをも、敢てやろうとはしなかった。遠廻しの弁解を集散したうえで、彼は危険の予想される役割を、郷に手渡した。（『全集』第一巻、二八一頁。傍線引用者）

ここで、愛子には死の覚悟はなく、夫が自分の願望に従わなかったことに対する報復手段として、郷を利用したことが明らかに。また、それをきっかけに、愛子と郷の関係は次の段階に進んだ。「最も戦場的な物々しさの中を、進行した」列車での会話においては、郷は愛子に翻弄される男で、愛子は悪女の一面を遠慮せずに発揮していることがより鮮明に描き出されていく。

「死を覚悟した方が、あの位で満足するんですの。おかしいわね」

「僕が来たのは、奥さんを守るためです。賤しい考えはありません」

「私には、賤しい考えがあるのよ」

「あつてもかまわんです」

「かまわんなら、どうしましょうか」

「どうされようが、御勝手です。僕は僕の義務を果します」（『全

ここで「賤しい考え」を持ち出したのは愛子であり、しかもそれについて、郷は否定している。一方で、愛子は郷を挑発している。この発話行為も彼らの関係においては、愛子が主導権を握っていることが示されている。さらに、愛子が郷に電報で護送の依頼を頼んだ行為は二重の意味を持つと考えられる。つまり、郷の軍隊での力に依存し、自分たちを護送する以外に、郷と曖昧な関係を結ぶことで、自分の願望に反した夫に対する報復の可能性が内蔵されている。ところで、注意したいのは、愛子の夫に対する期待がはずれたのみならず、郷との付き合いにおいては、ひたすら愛子が優位の立場にいたが、結局、愛子の思い通りにならなかったことである。この転機はラストシーンとしての襲撃によってもたらされた。

また、この場面では、「水川親子は眼をつぶり、耳をふさいだが、郷はその殺戮の現場から視線をそらすことができなかった」というように、襲撃を目撃した当事者のような視線が規定されている。そして、私刑の場面については、次のようにありありと描写されている。

捕えられた男たちのうち、軍服や国民服の着用者は、即座に射殺される。彼等は銃声につれ、一人また一人とよろめき、打ち倒れ、もがいた。そのたびに、トラックに積まれた女たちは泣き叫び、罵り騒いだ。男たちの或る者も、堪え切れなくなり、罵ったり、駆け出したりした。そして無情の射撃的となった。

それが三人〔郷中尉、愛子と彼女の息子——引用者注〕には、ありありと目撃できた。服ににじむ血の色は見えぬが、顔面や手を流れる無慙な紅はなまなましい。肉を打つ音、斬る音、貫く音。馬のいななき。銃剣のひらめきと、草具や汗の匂い。

（『全集』第一卷、二八四頁）

この場面を表現する際に、視覚だけでなく、色と音と匂いといった感覚についても鮮やかに描写し、聴覚と嗅覚も活用し、読者にその進行時の悲惨な殺戮場面を目の前に見ているかのような臨場感を味わわせる。進行時の戦争の残酷さを多角的かつ詳細に表現することによって、戦争に対する否定的な感情が浮かび上がる。同時に、軍人としての郷の心情の描出も忘れない。

そして、地の文では、「あの支那の女は、光栄ある死のために、心中を男に迫った。この日本女は、屈辱の生のために、「心中」を郷に迫っている」と綴られている。郷と愛子の「心中」と中国人のカッブルの「心中」が並置されている点は注目すべきだ。前半部分では、郷のかつて引き受けた捕虜の中国人男女が、一緒に連れて行かれる途中で、女性が男性を引きずるようにして谷へ飛び込み、自殺したと記されている。この関連付けにより、女性の執念は通底しているが、郷が愛子との「心中」よりも、国家との「心中」を選んだことが読み取れる。

最後に、地の文で「天皇陛下万歳」という「呪術的な中世風スローガン」を聞いてから、郷は愛子の制止を振り切って「逡巡を断ち切り、飛び出して襲撃者に向かって射撃し、殺されたと描かれている。

「呪術的」と「中世風」という言葉の使用から、語り手は郷の愛国心自体に前近代的な要素があることをほめかしている。この意味で、郷の死は殉国という意味を持つ。物語の結末で提示された「中尉が何物と心中を遂げたか」という問いを踏まえると、彼が愛している「滅亡」する運命にある日本と「心中」してしまったことは疑いない。

作中では、郷がこの凄惨な襲撃に巻き込まれたのは、愛子からの電報を受けた結果であることが明記されている。とりわけ、「私が電報でお呼びしましたの」と夫に知らせた愛子は、「意地悪い淑女」と形容されている。この描写によって、愛子のエゴイズムと夫に対する報復心が強調されている。同時に、愛子の責任も見られる。それ以外に、地の文で語り手は「郷は日夜、死を覚悟している」と説明している。同様に郷の発言にも「忠節をつくすために死ぬのは、我々にとって、一刻も忘れてならぬ重要事です」や「我々は国家のために死ぬ」といったような台詞が繰り返されている。先述した郷の決起に加え、郷の死が尽忠報国というナショナリズムに結びつくことが明らかになる。

つまり、郷の死は、愛子による道連れの原因で、そのうえで郷自身の愛国心が内発的モチベーションにあり、そして目の前の日本人の悲境が引き金となり、最終的には中国の遊撃隊が直接の実行者としてそれを遂げたのである。

こうして、戦後文学において一般に女性の身体性やセクシャリティが強調され、女性は戦争の被害者という固定観念が強いのに対して、「淑女綺談」は、郷のような日本人男性に対して「悪行」働いた女性を登場させる。本作は女性の存在が男性側の欲望の構造に嵌

まり込むのではなく、むしろ女性のエゴイズムと戦時下のナショナリズム問題に重点が置かれているのである。

六、おわりに

本論では、これまで取り上げられてこなかった、武田の日中戦争やアジア・太平洋戦争における女性の表象に関する問題に対し、「淑女綺談」が戦争中の女性像をどのように描いているのかについて考察した。

本作の愛子は愛国的な行動をしていたが、実際その背後には自己解放／女性解放の手段としての意図が見受けられる。むしろ自己解放・女性解放への欲求を満たすために、戦争を利用したことが描き出され、女性のアイデンティティに着目し戦争中の女性を表現している。

本作のヒロインは、他の「上海もの」に共通する女性のエゴイズムやしたたかな一面を継承しているが、同時に淑女以外のアイデンティティの可能性を自発的に探求しようとする意識を持つ唯一のヒロインである。女性像におけるジェンダー問題に関する批評性にかけては、以前よりも一歩踏み込んだと見られる。

他方で、武田は「上海もの」において、中国人女性や日本人女性、さらに混血の女性など、多様な女性キャラクターを創り上げてきたが、日本軍／戦争と関係したという共通の要素がこれらの女性たちに内在している。彼は、日中戦争やアジア・太平洋戦争における女性の役割に自覚的であるが、先に述べた周と梅と陸の罪悪感や自己

反省に対して、本作の愛子には戦争に加担したという自己反省は湧いてこなかった。異なる物語内時間なので、ヒロインの問題意識が違ふのは当然であると言えるが、「才女」などに比べて、本作に描かれた女性の戦争責任に関する問題意識の欠如は、前作より一種の「後退」だと言えなくもないだろう。

また依然として淑女の枠組み／家庭にとらわれている夫人の姿を見ると、女性としての自己解放の可能性が十分には表現されずに終幕したと言えるだろう。つまり、本作のヒロイン像は結局保守的なジェンダー規範に収斂することになったという限界が見られる。しかし、郷のヒロイズムの死とは対照的に、女性性を武器にしたたかに生き延びた本作のヒロインは、「上海もの」の女性物語において、特異な位置を占めていると言えるだろう。

付記 武田泰淳の著作からの引用は、『武田泰淳全集』（増補版、全一八巻・別巻二巻、筑摩書房、一九七八年）に拠った。

※注

- 1 水溜真由美は「豪華な接収住宅からの立ち退きは、占領者から敗者への転落を象徴する出来事だった」武田泰淳の『上海もの』における敗戦と立ち退き』（『国語国文研究』、二〇二〇年三月、一頁）と指摘している。
- 2 松本陽子は「武田泰淳『月光都市』論」（『阪大近代文学研究』第二号、二〇〇四年三月）で「月光都市」が従来あまり注目さ

れていなかった理由として、「武田の戦後の文学活動の出発と中国への罪悪感を結びつける捉え方に本作が当てはまらない」と指摘している。本論も、「淑女綺談」を論じるときに、同様の観点から考えることができる。

- 3 川西政明『武田泰淳伝』（講談社、二〇〇五年十二月）に収録されている「武田泰淳年譜」と同書二〇〇―二〇一頁。

- 4 「高校の同級生が、大学教師をしていたので、そこが目あてだったが、即座にこたわられた。〔中略〕文化協会と編訳館は、フランス租界の童話風の、御殿のような建物に同居しており、小竹氏は編訳館の方の理事だったから、私を家庭へうけ入れてくださったのだとしても、「困っちゃったなあ」という林さんの発言に、すぐ応えて「じゃあ、ぼくの所へ来てもらおうか」と言い出してくれたのは、まことに救いの神であった」『全集』第一六巻、五七九頁。

- 5 前掲『武田泰淳伝』、二〇〇頁。
- 6 前掲「小竹文夫先生のこと」。
- 7 「苦笑の前後」において、博士は「岸」であるからこそ、夫人は「岸夫人」であることが当然である。ただし、「岸夫人」という呼称は一回も現れない。
- 8 作中で「梅女士」と表記されているが、実は彼女の姓は「梅崎」であることが明記されている。
- 9 古林尚編『武田泰淳年譜』（『全集』所収）。
- 10 郭偉「女の国籍」論（『立命館言語文化研究』第一八巻三号、二〇〇七年二月、一一七頁）。

- 11 この二つの名前は彼女の混血の出自に由来している。彼女の名前に使われている「華」という文字は中華を指し、「大和」とは言うまでもなく日本を意味する。彼女の名前には強いナショナリティーという象徴性が付与されていることが明らかである。「下宿した初日から、外泊してしまうような私を、このアタマのするどい、美女の奥さんが、よくも監督かつ保護してくださったわい、と感謝している」前掲「小竹先生のこと」『全集』第一六巻、五七九頁。
- 13 「才女」の周、「聖女俠女」の梅（崎）と「女の国籍」の陸は全てエゴイズムの辣腕家として造型されている。
- 14 「才女」は日本の文化人である、武田自身と思わせる杉という男性人物を語り手としている。「淑女綺談」と異なるが、男性の視座から女性を観察するのは一致している。
- 15 国防婦人会は日中戦争やアジア・太平洋戦争期に軍事援護活動を展開していた。一九三二年三月一八日に、安田せいによって大阪で結成された。国婦は「国防は台所から」というスローガンを掲げ、一般大衆の主婦への浸透が驚くほど急速だった。岡野幸江ほか編『女たちの戦争責任』（東京堂、二〇〇四年九月）を参照した。
- 16 「才女」の周と「F花園十九号」の謝は同一のモデルである。「聖女俠女」についての先行研究には、天野知幸「マリヤはマリヤひとりの死を死ぬ——武田泰淳「聖女俠女」と戦後の上海——」（『金沢大学国語国文』第三四巻、二〇〇九年三月）がある。天野は「梅女士にとつて〈中国人〉の名前と姿は「装い」

- であり、真の意味での国籍・民族の越境体験ではない。繰り返すが、「日本の女」というアイデンティティを固持していることを梅女士の語りは強調していたからだ。偽りの越境体験とアイデンティティの「装い」（九四頁）と指摘している。
- 18 「それ（愛国婦人会——引用者注）に対して国婦は、スローガンは「国防は台所から」であり制服はかつぼう着である。（中略）また活動内容が、金だけ出して知らん顔ではなく、手足をつかったの労力奉仕にあることをも示している」前掲『女たちの戦争責任』、一一頁。
- 19 その支那服の特徴を見ると、ここでの支那服は旗袍であると考えられる。
- 20 武田は開高健との対談「亡命者の運命」（『歴史と人物』一九七四年三月号）で「女は、えい、かまうもんか、死ぬつもりなら言いたいことをいってやれということになる。肉体そのもので行動するんだな」（『全集』別巻二、二一五頁）と語っている。この発言は武田におけるジェンダー問題を表明している。「強健な軍人がむざむざと生き残っているはずはない。病弱無能の補充兵でさえ、立派に戦死したではないか。士官は何のために拳銃を手にしているのか。中尉は生を恥じ、死を望んだ」（『全集』第一巻、二八四頁）というように、郷の心理を描写している。
- 21

（ちよう ぶんけん・北海道大学大学院文學院

映像・現代文化論研究室 博士後期課程二年）